

【書評】

畠山由佳子・福井 充 編著
**『パーマネンシーをめざす子ども家庭支援
—共通理念に基づくケースマネジメントとそれぞれの役割』**
(岩崎学術出版社, 2023年, A5判, 312頁, 3,800円+税)

新 川 泰 弘
(関西福祉科学大学)

米国では、今から50年以上前の1974年に「児童虐待防止および処遇法 (Child Abuse Prevention and Treatment Act)」が制定されたことによって、虐待されている子どもの命を救うために、子どもを保護することが最優先課題となり、虐待されている子どもの安全を確保するために、虐待している親から子どもをすぐに引き離すことになったのである。しかしながら、その結果として子どもが施設や里親を転々とたらい回しにされる「ドリフト (drift)」や「リンボー (limbo)」と呼ばれる現象が深刻化していくことになったのである。そこで、そうした現象に対処するため、1980年には「養子縁組支援および児童福祉法 (Adoption Assistance and Child Welfare Act)」が制定されている。そして、この1980年法には、援助の対象である虐待やネグレクトを経験した子どもの恒久的で安定した養育環境を保障するという「パーマネンシー (Permanency)」の原則が含まれていたことから、「パーマネンシー法」と称されることになったのである。その後、1991年には家族維持の努力を求めた「家族維持法 (Families Prevention Act)」, 1997年には安全性、パーマネンシー、ウェルビーイングの実現を達成目標とする「養子縁組および安全家族法 (Adoption and Safe Families Act)」, 2018年には虐待やネグレクト

を経験した子どもを含めて、すべての子どもが、安全で安定した持続性のある家庭環境で育つべきであるという「ファミリー・ファースト・プリベンション・サービス法 (Family First Prevention Services Act)」が制定されている。

このように、米国では虐待している親から子どもを早計に引き離す措置ではなく、家庭維持と適切で十分な援助努力を行い、心理的親のもとで永続的に生活できる安全で安心な養育環境を保障していくというパーマネンシーの理念が浸透していくことになったのである。

日本では、1990年代に入った頃から「パーマネンシー」について語られ始め、2013年の「平成25年改正子ども虐待対応の手引き」において「パーマネンシー」という語が登場し、2017年の「新しい社会的養育ビジョン」(新たな社会的養育の在り方に関する検討会)で「パーマネンシー保障」について記されている。その後、こども家庭審議会の答申を受けて政府が策定した「こども大綱」(2023年12月22日)や2025年～2029年度の「社会的養育推進計画」においても「パーマネンシー保障」の理念の重要性が説かれている。

本書は、「パーマネンシー」理念に着目し、それを共通理念とした子ども家庭支援におけるケースマネジメントと実務者の役割を詳述した画期的

かつ先駆的な書籍である。

本書は、序章と終章を含めて、全9章から構成されている。各章のタイトルと執筆者は以下のとおりである。

- 序章 実務の役割とパーマネンシー（福井充）
- 第1章 パーマネンシープランニングとパーマネンシー（畠山由佳子）
- 第2章 家庭維持を目的とした在宅支援の展開——地域で子どもも親もまろごと「家庭」として支援するために（畠山由佳子、笹井康治、伊藤徳馬、福井充）
- 第3章 親子分離後のパーマネンシー保障に向けた支援展開——児童相談所のケースマネジメントを中心に（福井充）
- 第4章 パーマネンシー保障をめざす里親・フォスティング機関の役割（樽沼あづさ）
- 第5章 パーマネンシー保障をめざす母子生活支援施設の役割（中島尚美）
- 第6章 パーマネンシー保障をめざす児童家庭支援センター・児童養護施設の役割（橋本達昌）
- 第7章 社会的養護のもとで育つ若者のパーマネンシーとライフチャンス（永野咲）
- 終章 パーマネンシーをめざす実践の発展に向けて（畠山由佳子、福井充）

序章においては、本書の企画意図や背景、ねらいや構成が述べられており、とりわけ本書のねらいについては、「子ども家庭支援の実務（実践・施策）を貫く共通の価値となるべきパーマネンシーの理念と、その理念に沿った各実務の役割・方策を具体的に提示することで、パーマネンシー保障に向けた子ども家庭支援の全体的な進展に貢献することにある」（6頁）とされている。

第1章では、子どもの最善の利益という視点から、米国におけるパーマネンシーの成立や展

開、日本におけるその受容過程、子ども家庭支援に対するその意義などについて詳しい説明がなされている。そもそもパーマネンシー概念は冒頭で触れたように、いわゆるパーマネンシー法の原則として本格的に登場したのであるが、ここではそのパーマネンシー概念が次のように再定義されている。「子どもがこれからずっと続くと感じられる、将来の見通しを持った育ちの保障である。子どもが自分に対してコミットしてくれていると感じられる存在であり、そこに所属していると感じられ、いつでも戻れる場所であり、いつでも頼ることができる信頼できる1人以上の人との『つながり』である。それは周りの大人ではなく、子ども自身が定義するものであり、社会的・制度的に認められたものである。それはすべての子どもに対して社会が保障すべきものである」（37-38頁）。もう一つ重要な概念となっているのが「Reasonable Efforts（正当な努力）」であって、この概念については、その正当性を示すモデルが作成されるとともに、「これまでの米国での運用を参考にしながら、日本でも、子どもの親子分離等の大きな責任を伴う意思決定を下す際に、参考にすべき概念」（26頁）と意義づけられている。

第2章1節では、まず家族維持を目的とした「正当な努力」の実践例として、イリノイ州での在宅支援ケースが詳述されている。2節では、日本における在宅支援において市区町村が行うべき地域版ケースマネジメント実践モデルとして開発された福岡市の「支援型対応実践モデル Fukuoka city Alternative Response Model (FARM)」が紹介されている。3節では、支援を自ら求めない家族とつながって行われるケースマネジメント、支援につなげる家庭訪問の工夫（御用聞き訪問）が保護者支援事例を交えて解説されている。4節では、重層的支援体制整備事業を活用した地域支援について、事業概要、相談活動事例、支援ポイントが示されている。5節では、法的枠組みを活かしたケースマネジメントとして、児相の市町村指導委託、家裁の保護者指導勧告の枠組みが検討されている。

第3章では、児童相談所が中心として担って

いる親子分離後のケースマネジメントについて、そこで重要となっている子どものパーマネンシー保障の仕組みのための改善策や実践方法が、諸々のケースを通して明らかになった現状や課題を踏まえて、提示されている。それに際しては、「親子分離後のパーマネンシープランニングモデル概念図」(137頁)が独自に作成され、8要素のガイドラインが定められているとともに、この概念図に基づいた「(親子分離後の)パーマネンシープランの例 ※実践イメージ用の簡易版」(138頁)が示されている。また、ゴールを明確に定めたパーマネンシーの実践について、独自の研究結果である退所統計等のデータを踏まえて、実践の成果と課題が検討されている。

第4章では、パーマネンシー保障をめざす里親・フォスティング機関の役割について、米国におけるケースマネジメントとコンカレントプランニングの取り組みの紹介を通して述べられている。コンカレントプランニングとは、万が一家庭復帰が叶わなかった場合の他の選択肢を早期に検討し、同時進行で働きかけていくものであるが、それを実施するにあたってのポイントが筆者の経験に基づき、「ケースワーカーは実親や家族の強み、可能性を信じ、家庭復帰に向けて最善の努力を尽くす」など5点が挙げられている。ただしこうした米国での取り組みは日本においても十分可能であるものの、現時点では将来的な検討課題であるとのことである。

第5章では、母子生活支援施設の実践の現状と課題が踏まえられた上で、パーマネンシー保障をめざす母子生活支援施設の役割が明らかにされている。特に、母子生活支援施設における母と子の生命の保障と家族維持支援についての事例を手がかりに、「特定妊婦支援における重層的支援とケースマネジメントのイメージ」図が作成されているとともに、パーマネンシー保障に向けて、母子生活支援施設が担うべき正当な努力について、日々の実践の中で支援者が意識すべき視点、すなわち「利用者のニーズに対応できる支援体制の必要性：アセスメント力の強化」などの5つの視点への言及がなされている。

第6章では、パーマネンシー保障に関わって、児童家庭支援センターと児童養護施設が対象とされているが、とりわけ着目されているのが、児童家庭支援センター、児童養護施設、子育て支援センターの3事業を地元の基礎自治体と強力な連携関係を基盤に一体的かつ統合的に実施し、アウトリーチ型の地域家庭支援事業を積極的に取り組んでいる実践である。また、家族再統合・親子関係再構築支援を巡って、児童家庭支援センター、児童養護施設、児童相談所、地元の基礎自治体に関わった具体的な取り組みについても触れられ、地域における連携の重要性が強調されている。

第7章は、「社会的養護のもとで暮らす子どもたち／巣立った若者たちの、ライフチャンス」(271頁)について論じたものである。「ライフチャンス」という概念は、政治社会学者ダーレンドルフに由来し、そのダーレンドルフによればライフチャンスとは「『オプション (options) : 社会構造が付与している〈選択可能性〉』と『リガチュア (ligatures) : 帰属・社会的なつながり』の相互関係によって決まる『社会構造によって付与される個人の発展のための可能性』」(270頁)であるが、この概念に基づいて、ライフチャンスの保障に向けた方策が打ち出されている。

終章は、全体の総括がなされ、パーマネンシーを目指す実践の今後の発展の方向性が差し示されている。パーマネンシーについて「実践のための羅針盤として、進むべき方向性を示す価値理念の1つとして『パーマネンシー』があるべきなのだ」(292頁)と、今後の実践においてその価値を共有しておくべきものであるという思いが語られている。本書を指針として実務者が支援方策を考えることで、「パーマネンシー」の価値は、着実に日本の社会的養育に根づいていくことになる。しかしながら、継続的に実践し続けられるかどうかということが同時に問われることになるだろう。また、「多様なサービスの充実や活用のためには、資源の共有（特に都道府県が所管する社会的養護資源の多機能化による市区町村の家庭支援事業への開放）やそれを活かすケースマネジメントの連続性、たとえば親子分離の前後（市区町

村と児童相談所の間)で分断せずに家庭復帰等に向けて親子への支援を分担して並走するようつながりが望まれる」(296頁)とある。今後、行政と民間といった立場を超えるとともに、市区町村の事業と都道府県の社会的養護資源、市区町村と児童相談所といった壁を超えて、連携・協働できるかどうかということが、「パーマネンシー」の価値に根差した実践を社会に浸透させていけるかどうかの分岐点となり、決定的に重要となってくるだろう。

なお、本書において特に注目したい点は、「正
当な努力」と「FARM」である。

「正
当な努力」という概念に関しては、米国の実際の運用において、「正
当な努力にも適度な努力にもなりうる玉虫色の基準となっている」(25頁)とあり、「正
当な努力」にはどこまで努力をしたらいいか不明瞭であるという議論がある。しかしながら、「正
当な努力」について、「家族と関係を築き、家族を知ること、今まで家族が意識していなかったニーズを共に認知し、そのニーズに合ったサービスを家族の個性に合うように誂え、サービス提供のためのプランを立て、その効果を評価するという一連のケースマネジメントのプロセスに家族が参加できる(エンゲージする)ことを促す『努力』も『正
当な努力』の大事な部分となるべきだ」(50頁)と指摘しており、実務者がケースマネジメントに取り組む際に、家族のニーズに適った「正
当な努力」を行うことの重要性を説いている点は大変有意義であり、注目に値する。

FARM においては、「空間的・横断的マネジメントと関係機関のあり方」を図示し、「単体のサービスのつなぎで終わってしまっていることも多い」(76頁)と課題を指摘した上で、「複数のサービス間の調整など、家族についてのアセスメ

ントの結果を基とした支援プランの目標に併せて、利用するサービス全体を把握し、包括的にニーズを満たせるようにサービスをコーディネートすることこそが、空間的・横断的マネジメントである」(76-77頁)と説いている。そして、「時間的かつ空間的マネジメントを含んだ市区町村子ども家庭支援ケースマネジメント」も作図し、「地域が子どものための『家庭』としての養育環境としての機能をもち、その育ちを支えるような役割ができることを促し支えていくことこそが、市区町村子ども家庭支援が行うべきミッション」(78頁)であるという。また、「FARM ケースマネジメントモデル概念図」「FARM アセスメントシート」「FARM 支援プラン・評価シート」も提示されている。緻密な手続きによってモデル構築されていることに加えて、極めて実用的である点は非常に意義があり、見逃すことができない。

なお、本書は、「パーマネンシー」「ケースマネジメント」「正
当な努力」について、理解を深めることができる比類なき書籍であるため、官民を問わず、社会的養護や地域子育て支援の実践現場で実務にあたる実践家にとっての必読書といえる。また、子ども家庭支援の研究に取り組んでいる研究者、大学生、大学院生にも推薦したい。

いずれにしても、本書において、「パーマネンシー」の価値・理念と、それを実現する「ケースマネジメント」や「各実務者の役割・支援方策」が詳細かつ体系的に示されていることは高く評価できる。それゆえに、本書は、今日における子ども家庭支援を考える上で極めて貴重な一冊であるといえる。本書で詳細に解説されている「パーマネンシー」の価値・理念は、子ども家庭支援の研究にとってますます重要となってくると思われるので、今後のさらなる研究の蓄積を期待したい。